糠田古墳群（第2次）　鴻巣市

［　立地と環境　］

糠田古墳群は、ＪＲ高崎線北鴻巣駅から南へ約2・6㎞の鴻巣市糠田地先に所在する。遺跡の南側には秩父地方を源流とする荒川が東流し、東側には糠田橋が架かっている。遺跡は大宮台地の北西端に立地している。遺跡周辺は表層を沖積土で覆われているが、これらの大半は寛永6年（1629）に行われた荒川の瀬替え以降に堆積したものと考えられる。第1次調査では古墳時代前期の竪穴住居跡や中期の溝跡、後期の井戸跡が調査されている。

糠田古墳群周辺の遺跡を概観すると、古墳時代に遺跡数は増加している。古墳時代を通じて集落が営まれた遺跡としては、赤台遺跡、中三谷遺跡、生出塚遺跡がある。生出塚遺跡では竪穴住居跡、古墳跡や埴輪窯跡、工房跡、粘土採掘坑が調査され、製作された埴輪は、新屋敷遺跡や笠原古墳群、行田市埼玉古墳群等に供給されている。

奈良・平安時代になると遺跡数は減少傾向にある。

中世ではいくつかの館跡が挙げられる。箕田地区の箕田館跡や糠田地区の安達館跡、大間地区の源経基館跡等がある。

近世には荒川に糠田河岸が設けられ、舟運の拠点の一つになるとともに、「糠田の渡し」として人々の往来に使用されていた。

第１地点Ｃ区 第１号住居跡

［　発見された遺構　］

第2次調査では、昨年度の第1次調査の第1地点A区とB区の中間地点であるC区と、第1地点から約100ｍ上流側の第2地点の二地点を調査した。遺構検出面の標高は、第1地点C区が約15ｍ、第2地点は約14ｍである。

遺構番号は第1次調査から継続して付した。

第1地点C区

竪穴住居跡は、古墳時代前期のもので、2軒は第1次調査の続きである。第1号住居跡は、一辺が約4・3ｍ～4・7ｍの方形で、深さは約0・2ｍである。北東寄りから炉跡が検出された。遺物は土師器の甕や器台の破片が出土した。第3号住居跡はB区で検出された竪穴住居跡の東側の一部である。一辺が約2・5ｍの方形で、深さ約0・2ｍである。

近世の第2号性格不明遺構からは、近世陶磁器や砥石などの石製品などが多く出土した。

第2地点

第2地点は幅が6ｍ～16ｍと狭い調査区で、堤防の法尻を確保するため遺構の調査ができたのはさらに狭い範囲となった。

地表面から約2ｍの深さで厚さ約0・3ｍの遺物包含層が検出され、弥生時代から平安時代の土器が出土した。また、遺構は、この遺物包含層を精査していく過程で検出された。

今回の調査で発見された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡5軒、時期不明の土壙2基、井戸跡1基、ピット3基である。竪穴住居跡は調査区外へ続き、全容を確認できたのは1軒のみである。

中央付近で検出された第1号住居跡は、一辺が約2・3ｍの方形で、深さは0・15ｍである。炉跡は検出されなかった。前期の土師器の甕や台付甕の破片が出土した。第1号住居跡の東側に隣接して検出された第4号住居跡は、一辺4ｍ以上と推定され、深さは0・15ｍである。北東壁にカマドが構築されており、ソデの補強材として土師器の長胴甕が設置されていたほか、土錘が出土した。

［　まとめ　］

第2次調査では、古墳時代及び近世の遺構が検出された。遺物は弥生土器や平安時代の土器が出土している。糠田古墳群を構成する古墳の墳丘や周溝といった遺構は検出されなかったが、第1地点C区で検出された溝跡からは円筒埴輪の破片が多数出土しており、古墳の周溝である可能性も残る。第1地点は古墳時代前期のものに限られ、その時期の集落が営まれていたと考えられる。それに対し、第2地点からは古墳時代後期の竪穴住居跡が検出され、第2地点周辺には古墳時代後期の集落が展開していたと考えられる。

『鴻巣市史』によれば、糠田地区の住宅地一帯で埴輪片が採集されている。なかでも遺跡の北東側に位置する聖泉寺境内の墓地からまとまって埴輪片が採集されている。このことから遺跡の北側にかけて古墳群が広がり、第2地点が位置する南西側にかけて古墳群と同時期の集落が展開していたと考えられる。

また、古墳時代前期では、第1地点及び第2地点にかけて竪穴住居跡が確認されており、これまで知られていなかった古墳時代前期の集落が展開していたと考えられる。

■ 所在地
鴻巣市糠田地先

■ 実施期間（事業者）
令和５年10月～令和６年３月
（国土交通省関東地方整備局）

■ 調査面積
2,168.5㎡

■ 遺跡の種別
集落跡

■ 主な遺構
第１地点Ｃ区
古墳（住居跡４・溝跡11）、近世（性格不明遺構１）、時期不明（土壙12・ピット32）
第２地点
古墳（住居跡５）、時期不明（土壙２・井戸跡１・ピット３）弥生～平安時代（遺物包含層）

八木上遺跡（第7次）狭山市

［ 立地と環境 ］

八木上遺跡は、狭山市大字笹井に所在し、入間市との市境に接する狭山市西端部に位置する。入間川中流域左岸の河岸段丘上に立地し、入間川を挟んだ対岸に、武蔵野台地、加治丘陵東端部を臨む。

今回の第7次調査は、第2～5次調査区の西側にあり、3段から成る段丘の西の中位段丘面に立地する。

狭山市域の遺跡を旧石器時代から概観する。旧石器時代は西久保遺跡が入間川左岸に立地し、石器集中や礫群が検出された。

縄文時代は、前期から中期にかけて遺跡が増加する。入間川左岸の八木前遺跡では、黒浜式から諸磯a式期の住居跡と土壙群が検出されている。中期になると遺跡数が急増する。八木上遺跡の東側に隣接する埼玉県選定重要遺跡の宮地遺跡では、勝坂式期から加曽利E式期の大規模な集落が検出された。後期になると遺跡数は減少し、晩期の遺跡は確認されていない。

弥生時代から古墳時代前・中期にかけても遺跡は発見されていない。古墳時代後期になると入間川左岸に笹井古墳群、右岸に稲荷山古墳群が形成される。

奈良・平安時代になると入間川左岸の八木北遺跡から川越市の霞ヶ関遺跡まで、集落跡が途切れなく帯状に連なって所在している。また、入間川を挟んだ遺跡の対岸には、武蔵国分寺の再建瓦を焼いた東金子窯跡群が広がっている。

中世には鎌倉街道上道が狭山市を南北に貫き、その枝道も多数確認されている。

近世になると、狭山市域は天領、川越藩領、旗本の知行地などに分割統治された。また、現在の集落にも近世・近代の歴史的景観が残されている。

遺跡全景

［ 発見された遺構 ］

八木上遺跡第7次調査では、旧石器時代の遺物と縄文時代、奈良・平安時代、近世の遺構が検出された。

旧石器時代

第1号溝跡底面のローム層中から黒曜石製のナイフ形石器が出土した。石器集中は検出できなかった。

縄文時代

縄文時代前期の集石土壙1基が検出された。

調査区東部で、集石土壙が検出された。円形の土壙の中に、被熱した破砕礫（焼礫）が検出された。

奈良・平安時代

竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、土壙1基が検出された。竪穴住居跡のカマドソデの補強として用いられた平瓦、須恵器の坏が出土した。カマドの右ソデからは、チャートの大型礫と平瓦が直立した状態で検出され良好な状態で遺存していた。遺構の時期は8世紀末～9世紀初頭である。調査区中央からは、3間×2間側柱の掘立柱建物跡が1棟検出された。建物の軸方向は第1号住居跡の主軸方位と揃って検出された。

第１号集石土壙

近世

溝跡1条、土壙8基、畠跡4箇所が検出された。土壙の多くは畠跡より新しい。第2号畠跡からは、陶磁器の小破片が少量出土し、遺構の時期は18世紀後半頃と考えられる。

［ まとめ ］

旧石器時代の調査では、ローム層中から基部加工ナイフ形石器、縦長剥片、石核が単独で出土し、旧石器時代の活動痕跡を確認することができた。八木上遺跡と周辺に旧石器時代の遺跡が存在する可能性がある。

調査区東部を中心に、縄文時代早期・前期の土器片が少量出土したが、明確な縄文時代の遺構は、第1号集石土壙のみであった。過去の調査では段丘中位面で前期中葉、上位面では前期末葉の集落が検出されている。

第7次調査では、奈良・平安時代の集落の一部を確認できたことが大きな成果である。特にソデ補強材として用いられた瓦の出土は東金子窯跡との関係を示すものとして注目される。溝跡の分布状況から、集落の本体は、調査区の南側に広がっていた可能性が高い。

■ 所在地
狭山市大字笹井字八木上2338－3外
■ 実施期間（事業者）
令和５年11月～令和６年３月（埼玉県）
■ 調査面積
1,954.22㎡
■ 遺跡の種別
集落跡
■ 主な遺構
旧石器（遺構なし）
縄文（集石土壙１）
奈良・平安（住居跡１・掘立柱建物跡１・溝跡３・土壙１）
近世（溝跡１・土壙８・畠跡４）
時期不明（溝跡３・土壙72・ピット36）

権現遺跡（第2次）　吉見町

■ 所在地
吉見町大字久米田209ほか
■ 実施期間（事業者）
令和５年４月～令和６年３月（埼玉県）
■ 調査面積
1,080㎡
■ 遺跡の種別
集落跡
■ 主な遺構
第１地点
古墳（土壙３・井戸跡５・溝跡４・ピット３・焼土跡１）、奈良・平安（住居跡１・土壙３）、中世（溝跡２・ピット３）、近世（溝跡７）、時期不明（ピット６）
第２地点
古墳（土壙９・溝跡４・ピット９）、奈良・平安（土壙１・井戸跡２）、中世（溝跡１）、時期不明（土壙２・ピット32）
第３地点
古墳（住居跡１・土壙８・井戸跡１・溝跡12・ピット23）、奈良・平安（土壙１・井戸跡１・溝跡２・ピット12）、中世（土壙１・溝跡１）、時期不明（土壙３・ピット124）

［　立地と環境　］

権現遺跡は、比企郡吉見町久米田に所在する。標高約14～16ｍの自然堤防上に立地し、東に荒川、西に市野川が流れる。二ノ耕地遺跡とは横見川を挟んで対峙している。

権現遺跡は、令和４年度に当事業団によって第１次調査が実施された。縄文時代、古墳時代前期、奈良・平安時代の遺構が検出されている。

［　発見された遺構　］

第２次調査では、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構が検出された。調査地点は、現道を境に西から第１・２・３地点と呼称した。第１地点は令和４年度の第１次調査区に隣接する。

遺跡全景

第１地点

古墳時代前期の第11号井戸跡は、上層から中層で土師器台付甕や甑の破片、最下層から器台が出土した。検出された溝跡のうち、第７号・第17号・第18号溝跡は、第１次調査で検出された第１号溝跡とともに、方形の区画を形成している。

奈良・平安時代の第２号住居跡は、床面から須恵器坏や甕が出土した。時期は８世紀後半と考えられる。

中世の第３号溝跡は、第２地点から延びる溝跡で、第１地点に入ってからＬ字形に曲がる。第15号溝跡は調査区を南北方向に横断している。溝跡の中腹に幅０・６ｍの段が設けられていた。最下層から常滑焼甕の破片が出土し、時期は13世紀代と考えられる。

第28号溝跡

第２地点

古墳時代前期の第７号土壙は、住居跡の一部である可能性がある。土師器台付甕や壺、器台が出土した。第２号溝跡は、大規模な溝跡で、北東から南西方向に走行し、調査区外に向かって延びる。覆土の上層から、完形に近い土師器壺、台付甕、高坏、器台等が大量に出土した。

平安時代の井戸跡からは、９世紀頃の須恵器の甕、坏等が少量出土した。

中世の第３号溝跡は、溝跡の中腹に幅０・４ｍの平坦な段が設けられていた。中世の陶磁器片が少量出土した。

第３地点

古墳時代前期の第25号・26号溝跡は、Ｌ字形に屈曲している。第25号溝跡からは、形のわかる土師器台付甕３点と多量の土師器破片が出土した。溝跡の形状や遺物の出土状況から、これらの溝跡は平面隅丸方形の周溝持建物跡の周溝部と考えられる。第28号・29号・31号・34号溝跡も同様に、平面形が隅丸方形の周溝持建物跡の周溝部の可能性が高い。

平安時代の第14号井戸跡は円形で、素掘りの井戸である。９世紀代と考えられる須恵器坏等が少量出土した。

中世の第23号溝跡は、南北方向に走行する溝跡で、第27号溝跡を壊していた。遺物は中世の渥美焼甕や常滑焼甕等が出土した。時期は、12世紀後半から13世紀前半代と考えられる。

［　まとめ　］

権現遺跡第２次調査では、主に古墳時代から奈良・平安時代と中世の遺構・遺物が検出された。そのうち、主体となったのは古墳時代前期である。住居跡は検出されなかったが、隅丸方形に浅い溝が巡る周溝持建物跡の周溝部の可能性がある溝跡が確認された。集落として約１世紀にわたり継続して営まれ地域における古墳時代前期の中核的な集落跡であったと考えられる。この地域の歴史を考える上で貴重な発見となった。

中世においては、第１・２地点から検出された第３号溝跡が、南側に方形の地割が残存する無量寺が隣接していることから、当寺院あるいは館跡に関連する可能性がある。

二ノ耕地遺跡（第3次）吉見町

［ 立地と環境 ］

二ノ耕地遺跡は、比企郡吉見町久米田に所在し、標高約14～16ｍの自然堤防上に立地する。遺跡の東に荒川、西に市野川が流れ、権現遺跡と横見川を挟んで対峙している。

二ノ耕地遺跡は、平成28年度に吉見町教育委員会によって第1次調査、令和4年度に当事業団によって第2次調査が実施された。

今回の調査区は、第2次調査区第1地点と第2地点の間に当たる。西に隣接する三ノ耕地遺跡では、4次にわたって調査が実施されており、第1～3次調査を吉見町教育委員会が、第4次調査を当事業団が実施している。調査では、縄文時代晩期の水場遺構や住居跡、古墳時代前期の方形周溝墓群および県内最大の前方後方形墳墓が特筆される。また、奈良・平安時代の溝跡は、古代道路跡の側溝と考えられている。

遺跡全景

［ 発見された遺構 ］

今年度の調査地点は2地点で、西側を第3地点、東側を第4地点と呼称した。事業に伴う調査地点は西から第1地点、第3地点、第4地点、第2地点となる。

第3地点

古墳時代前期の第1号方形周溝墓は、南半部が調査区外に延びている。北側の周溝のみで、埋甕施設は検出されなかった。遺物は、土師器壺、甕、台付甕、高坏等が覆土中より出土した。

第３号住居跡

平安時代の第2号住居跡は、やや歪んだ隅丸方形で、南西側に焼土が分布していた。床面から、土師器甕や坏、須恵器甕等が出土した。時期は9世紀後半と考えられる。また、掘立柱建物跡が9棟検出された。いずれも側柱建物である。第6号掘立柱建物跡は桁行6間と大規模である。いずれも時期は8世紀後半と考えられる。

中世の第57号土壙は平面楕円形で、最下層から出土した瓦質土器内耳鍋の破片は、15世紀代と考えられる。

近世の第41号溝跡からは、肥前磁器碗、志野磁器皿、瀬戸美濃の擂鉢等が出土し、時期は17～18世紀代と考えられる。

第4地点

古墳時代前期の第31号井戸跡は、平面円形で、底面からほぼ完形の赤彩された壺が1点出土した。第57号溝跡は、南に向かって蛇行しており、底面は南に向かって低くなっていた。上層から下層にかけて土師器甕や高坏、東海系の土師器壺の口縁部等が出土した。

奈良・平安時代の第11号掘立柱建物跡は、4間×2間の側柱建物である。8世紀後半の須恵器坏が出土した。

近世の第29号井戸跡は平面楕円形で、断面形が円筒形の素掘りの井戸である。外径0・6ｍの桶を3個体重ねて井筒に転用していた。下層から17世紀後半の肥前陶器刷目釉鉢の底部、木製品の蓋や板碑を転用した石製品等が出土した。

［ まとめ ］

第3地点では古墳時代前期の方形周溝墓が単独で検出された。方台部は削平を受け、埋葬施設は検出できなかった。出土遺物は土師器の壺、瓢壺や器台等が主体であり、甕は少量であった。三ノ耕地遺跡で見つかった周溝墓群との関連が考えられる。

また、井戸跡の最下層から完形に近い土器が出土しており、井戸廃絶に伴う儀礼が推定される。

奈良・平安時代の掘立柱建物跡は、11棟検出され、主に側柱建物が調査区全体に分布している。特に、調査区中央では、軸方向の異なる建物跡が切り合って検出された。これは、建物跡が複数の時期にわたる可能性を示す。

第4地点で検出された溝跡は、方形に土地を区画していたと推測できる。令和4年度の調査成果で検出された、同様の特徴がある溝跡から出土した遺物と合わせて、今後、吉見町の中世を明らかにする上で重要な資料と考えられる。

■ 所在地
吉見町大字久米田209ほか
■ 実施期間（事業者）
令和５年４月～令和６年３月（埼玉県）
■ 調査面積
1,760㎡
■ 遺跡の種別
集落跡
■ 主な遺構
第３地点
古墳（方形周溝墓1・井戸跡1）、奈良・平安（住居跡1・掘立柱建物跡9・土壙2・溝跡3・柱穴64）、中世（土壙1・溝跡1）、近世（土壙3・井戸跡1・溝跡10・ピット51）、時期不明（土壙2・ピット10）
第４地点
古墳（土壙2・井戸跡1・溝跡2）、奈良・平安（住居跡1・掘立柱建物跡2・土壙3・溝跡1・性格不明遺構1・ピット19）、近世（井戸跡1・溝跡1・）、時期不明（土壙3・ピット7）

小久住遺跡（第1次）飯能市

［　立地と環境　］

小久住遺跡は、飯能市西部の山間地、入間川左岸の幅の狭い河岸段丘上に所在する。これまでの発掘調査事例はないが、飯能市の遺跡分布図によれば、縄文時代前期の繊維土器と、中期の加曽利E式の土器片が採集される遺跡として知られていた。

飯能市は埼玉県の南西部に位置しており、西部は秩父郡市に接する山間地、東部は入間川によって形成された飯能台地となっている。西部は約8割が山地で、高麗川、成木川そして入間川が東に向かって流れ、これらの河川に沿って狭い平地が形成され、ここに人家が集中している。市内には177箇所の遺跡があり、旧石器時代から人々の活動の痕跡が確認されている。

遺跡全景

縄文時代の遺跡は多い。草創期では、小岩井渡場遺跡から微隆起線文土器や爪形文土器が出土している。早期は小岩井渡場遺跡から住居跡が1軒検出されている。小久住遺跡上流の山間部に倉久保遺跡、堂ノ根遺跡、天王前遺跡などが所在する。前期になると、市内ほぼ全域に遺跡を確認することが出来る。

中期にはさらに遺跡数が増加し、中期後半の遺跡は80箇所以上を数える。加能里遺跡では縄文時代中期の住居跡が60軒以上検出された。中期以降も後・晩期まで集落が長期的に継続された。中橋場遺跡は、縄文中期の終わりから晩期の遺跡で、配石遺構が多数検出された。

古墳時代の遺跡は少なく、加能里遺跡では古墳時代前期末から中期初頭の住居跡が検出されている。

奈良時代になると、南小畦川流域を中心に多くの人々が住み始め、多くの遺跡が残されている。代表的な遺跡として知られている張摩久保遺跡からは、奈良・平安時代の多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。

平安時代（9世紀以降）になると、高麗丘陵や加治丘陵の裾部や高麗川・入間川上流の山間部などにも集落が広がっている。

近世の遺跡としては、江戸時代後期から明治時代前半にかけて「飯能焼」と称された陶器を焼いた、飯能焼原窯跡などがある。

［　発見された遺構　］

今回の調査で発見された遺構の時期は大きく、縄文時代前期前葉（約6500年前）と中期中～後葉（約4500年前）である。

縄文時代前期前葉

竪穴状遺構1基と遺物包含層1箇所が検出された。竪穴状遺構は、平面形が方形の浅い掘り込みで、大半が調査区外に延びている。前期前葉の深鉢破片が竪穴内に落ち込むように出土した。

遺物包含層は調査区中央に分布し、層の厚さは約30㎝である。完形の土器は無く、破片の状態で散漫に検出された。

縄文時代中期中葉から後葉

竪穴住居跡1軒、埋甕4基、集石15基、遺物集中10箇所、遺物包含層1箇所が検出された。

第1号住居跡は、遺構の大半が調査区域外に延びていた。平面形は円形と考えられ、柱穴と考えられるピットが検出された。縄文中期後葉の土器片が出土した。

埋甕は、遺物包含層の上面から検出された。いずれも口縁部から胴上部の深鉢形土器を逆位置に埋設したものである。

第15号集石土壙

集石の石材は破砕礫・角礫状の砂岩を中心とし、少量のチャートが含まれていたものがほとんどであったが、第6・9号集石は円礫のチャートが主体で、底面に円礫が石組みのように配されていた。

遺物包含層は平均層厚40㎝で分布し、包含層中には、完形やそれに近い土器や石器が密集する箇所があり、「遺物集中」とした。

［　まとめ　］

山間地を蛇行して流れる入間川上流域では、両岸の平坦面に多くの遺跡が残されている。小久住遺跡では、前期前半や中期後半の土の遺構・遺物が検出された。

縄文時代前期前葉の繊維を含む土器片が検出された。竪穴状遺構が検出されていることから、前期前葉には、周辺で集落が営まれていたと考えられる。

縄文時代中期中葉から後葉の遺構や遺物包含層は、前期の遺物包含層の上層に形成されていた。遺物の大半は、中期後葉に限定されその時期の集落が形成されていたと考えられる。調査区が狭小のため、集落の全容は明らかにできなかったが、これらの調査成果は、狭小な段丘面における集落の設計や廃棄のあり方を比較検討する資料として貴重なものとなった。

■ 所在地
飯能市原市場117－1他
■ 実施期間（事業者）
令和5年4月～令和5年11月
（埼玉県）
■ 調査面積
1,454㎡
■ 遺跡の種別
集落跡
■ 主な遺構
縄文（住居跡1・竪穴状遺構1・埋甕4・集石15・遺物集中10・遺物包含層2）

塚原南遺跡（第1次）　東松山市

［　立地と環境　］

塚原南遺跡は、埼玉県のほぼ中心に位置する東松山市大字下唐子字塚原に所在する。遺跡は都幾川に面し、遺跡の北側には都幾川によって形成された河岸段丘が認められる。南側には岩殿丘陵が広がっている。ローム台地上に立地し、調査区の西側の一部が都幾川の浸食により削られ、河岸段丘の低位面となっていた。

遺跡は都幾川の屈曲部に当たり、景観としては「淵」を臨む形となっている。

遺跡の周辺には、旧石器時代から近世にかけての遺跡が分布している。

旧石器時代は、遺跡の北側に所在する塚原遺跡が挙げられ、石器集中が2箇所検出された。縄文時代早期の土器、前期の土器、中期の竪穴住居跡と土壙も検出されている。弥生時代は、中期後半以降の遺跡が多く見られ、雉子山遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡群が検出され、土器は、壺や甑が出土している。

古墳時代になると、遺跡数が急増し集落の規模も大きくなる。前方後円墳などの古墳も築造される。古墳時代後期になると古墳の築造がより活発となり、各地に群集墳が展開する。塚原南遺跡の北側の河岸段丘上には、塚原古墳群、原坂口古墳群、御嶽山古墳群が形成され、これらをまとめて下唐子古墳群と総称されている。

奈良・平安時代には、遺跡近隣の岩の上遺跡で9世紀の竪穴住居跡が検出されている。

中世では、比企氏、野本氏、高坂氏などの武士団が東松山市を中心とする比企郡に拠点を置いていた。

遺跡全景（西から）

［　発見された遺構　］

縄文時代

竪穴住居跡2軒、土壙1基が検出された。前期前葉の第22号住居跡は壁柱穴が検出され、土器片や石器の剥片が出土した。

古墳時代

竪穴住居跡13軒、土壙1基、ピット1基が検出された。そのうち竪穴住居跡は、前期3軒、中期3軒、後期7軒が検出された。

前期の第19号住居跡は、一辺1・58mと小型で、大部分を木根により壊されていた。ピット2は径0・4mで、炭化物とともに、土師器の壺や甕が重なって多量に出土した。中期末頃の第8号住居跡からは、土師器の高坏、甕、坏などが多数出土した。中期末頃の第17号住居跡からは、須恵器の坏、高坏、土師器の高坏、甑、甕が多数出土した。石製品では、臼玉と紡錘車が出土した。

後期の住居跡では、カマドのソデ部には、凝灰岩質のブロック状の石材が構築材として多用されていた。第7号住居跡は、カマドが2基、北側と東側から検出された。土師器の坏や甕の他、鉄製の刀子、滑石製の石製模造品が出土した。

奈良・平安時代

竪穴住居跡2軒、性格不明遺構1基が検出された。第14号住居跡は、カマドのみ検出され、8世紀頃の土師器坏、甕や南比企窯産の須恵器坏、末野窯産の須恵器坏蓋などが出土した。

中世

大型の溝跡が1条検出された。第1号溝跡は、調査区東側から北側に向かう幅5・0m、長さ38・5mで、調査区外に続いていた。15世紀頃のかわらけが出土した。溝跡の北辺に沿ってピット列が検出され、溝跡に付随する遺構であった可能性が考えられる。

［　まとめ　］

塚原南遺跡第1次調査の発掘調査では、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺構や遺物が検出された。縄文時代前期前葉の第22号住居跡は、この時期において東松山市で初の検出例となった。遺跡は古墳時代前期から後期にかけて営まれた集落跡であることが判明した。後期では、竪穴住居跡の軒数が多く、近接する下唐子古墳群との関連性が考えられる。このほか、奈良・平安時代では住居跡が、中世では大型の溝跡が検出され、この地における継続的な人々の生活が伺える。中世の大型溝跡は、館の堀や区画溝等の機能をもっていた可能性もあり、この地域の中世史を紐解く上で貴重な発見となった。

第7号住居跡

■ 所在地
東松山市大字下唐子字塚原1101他

■ 実施期間（事業者）
令和5年4月～令和5年11月（埼玉県）

■ 調査面積
2,400㎡

■ 遺跡の種別
集落跡

■ 主な遺構
縄文（住居跡2・土壙1）
古墳（住居跡13・土壙1・ピット1）
奈良・平安（住居跡2・性格不明遺構1）
中世（溝跡1）
時期不明（住居跡1・掘立柱建物跡1・土壙23・ピット79）

下長塚遺跡（第1次）上里町

［　立地と環境　］

下長塚遺跡は、児玉郡上里町神保原町に所在する。神流川扇状地の扇端付近の微高地上に立地する。標高約53ｍである。東に御陣場川が北流する。上里町の地形は、洪積台地の本庄台地、約1万年前に形成された神流川扇状地、烏川・利根川沿いに広がる沖積低地の烏川低地からなっている。

上里町域には、古墳時代から古代の遺跡が多数確認されている。本庄台地には、本庄市小島地区から上里町神保原地区にかけて旭・小島古墳群が広がり、浅間山古墳が町内に所在する。神流川扇状地には、北稲塚遺跡、金久保内出遺跡、清水南遺跡、五明廃寺、中堀遺跡、帯刀古墳群等が分布する。一方、烏川低地には、利根川や烏川の氾濫の影響により、遺跡は確認されていない。

調査区位置図

［　発見された遺構　］

調査区は3箇所にわかれ、南から第1地点、第2地点、第3地点と呼称した。

第１地点

古墳時代後期と中・近世の遺構が検出された。

古墳時代は、竪穴住居跡が5軒確認された。第1号住居跡は、規模が主軸長3・0ｍ、幅3・4ｍで、カマドは東壁に設置されていた。

中・近世は、土壙7基、ピット49基が検出された。いずれも覆土は暗灰褐色土で、天明3年（1783）の浅間山の噴火によって降下した浅間Ａ軽石と思われる白色粒子が含まれていた。

第１地点（南から）

第２地点

古墳時代後期と中・近世の遺構が検出された。

古墳時代は、竪穴住居跡2軒が検出された。第6号住居跡は、調査区北端に位置する。主軸長3・25ｍ、幅3・50ｍで出土した遺物は少ない。カマドは南側にあり、煙道の出口からは底部を欠いた土師器の坏が出土した。第7号住居跡は、第6号住居跡の南に位置する。規模は確認できた範囲で、主軸長が6・0ｍ、幅が2・5ｍであった。西半が調査区外に延びる。遺物はカマドの焚口周囲に集中し、土師器坏やカマドの構築材に転用されていた土師器甕が出土した。焼土や炭化物を含む暗褐色土が厚く堆積していた東壁の中央付近では、完形の土師器坏がまとまっていた。時期はいずれも7世紀代と考えられる。

第２、第３地点（南から）

中・近世は、土壙15基、ピット88基が検出された。出土遺物は少なかった。

第３地点

奈良・平安時代の土壙4基、ピット14基が検出された。

［　まとめ　］

第1次調査では、古墳時代後期の遺構が主体であった。第1地点と第2地点の双方から、竪穴住居跡が検出された。同一の集落かは今後の調査結果を待つ必要があるが、神流川扇状地の扇端付近における古墳時代の集落の様相を解明する貴重な調査結果となった。

第６号住居跡

■ 所在地
児玉郡上里町神保原町1055－8他
■ 実施期間（事業者）
令和５年４月～令和５年10月（埼玉県）
■ 調査面積
1,361.7㎡
■ 遺跡の種別
集落跡
■ 主な遺構
古墳（住居跡７）
奈良・平安（土壙４・ピット14）
中・近世（土壙22・ピット137）